普通

第1回

国語

大森学園高等学校　普通科

第1回　2月10日

令和6年度　入学試験問題

国語

注意

1　指示があるまで開いてはいけません。
2　問題用紙にも受験番号を算用数字で記入しなさい。
3　試験時間は**50分**です。
4　問題は一から三までで1ページから18ページにわたって印刷してあります。
5　解答はすべてマークシートで答えるようになっています。この問題用紙の裏に書いてある解答用紙記入上の注意をよく読んで答えなさい。
6　解答用紙と問題用紙は別々に提出しなさい。

受験番号					

一、次の文章を読んで後の問に答えなさい。

春は、あけぼの ――――（　X　）

あなたは四季のうちで、どの季節がいちばん好きですか。答えはさまざまでしょうが、多くの人はやはり春、もしくは秋をえらぶのではないでしょうか。

では、春と秋とくらべたら？　古来、日本人はこうした問いを発しては、大いに議論してきました。いわゆる「春秋論争」です。そんなことは人それぞれの好みなんだから、どっちだってかまわないではないか、と思われるかもしれません。しかし、その「春秋論争」は、たんに個人の好みをいい合っているのではなく、じつは美について、すなわち春と秋ではその美しさにおいてどちらが勝っているだろうか、という美学論争だったわけです。そして、日本人はこのような議論を重ねることによって、いつか日本独特の自然の美学をつくりあげていったのです。

美とは何か、などといいだしたら、それこそたいへんむずかしい美学論議になってしまうでしょう。が、美というものは【　Ⅰ　】に存在するものではなく、ある対象をどう見るか、どう感じるか、という人間の見方、感じ方のなかに生まれるものといっていいと思います。つまり、端的にいうなら、美とは【　Ⅱ　】なものなのです。

なにを美しいとし、なにを醜いものと感じるか、私たちはふだん、ものの美醜を見わける感覚を無意識のうちに働かせています。その感覚は生まれつき持ち合わせた【　Ⅲ　】な感受性のように思われますが、しかし、じつをいうと、そうした感受性というものは、その人間が、その民族が、長い歳月をかけて徐々に培（つちか）ってきたものにほかなりません。［A］自分の生まれ育った環境によって人間の美感は異なり、民族によって美醜の意識はかけちがってしまうのです。別言すれば、何かを美しいなあと思うその心は、習慣によって、経験によって、学習によって、はじめて身についたものだということです。

むろん、咲き乱れる花を見れば、だれもが美しいと思うでしょう。満天の星が輝くのを見あげればきれいだと思うにちがいありません。美しいものは美しい。だから美というものは【　Ⅳ　】であり、万人の心をひとしくとらえるものだと、ついそう考えがちです。しかし、おなじ星空をながめても、それを美しいと感じる感じ方は【　Ⅴ　】なのです。

他の民族といわず、日本人同士でさえそうです。私はこんな話をきいてびっくりしたことがあります。夏休み、都会の子供たちを自

然に親しませようと、空気の澄んだ高原へ連れて行ったところ、夜になって満天の星が輝きだすと、①子供たちがいっせいに気味悪がったというのです。気味が悪い！　都会の子供たちが見なれている夜空はいつも煤煙（ばいえん）でかすんでおり、彼らはそれが空というものだと思っている。だから数えきれぬほどの星が輝いている空は、美しいどころか、薄気味悪く思えるのです。これをもってしても、人間の美的感覚というものが、環境によっていかにちがったものになるか、充分に察することができましょう。極言すれば、美的感覚とは教えられることによって、はじめて人間の心のなかに育つといってもいいのです。

さて、前記の「春秋論争」ですが、②紀貫之は「春秋いづれかまさると問はせ給ひけるを詠みて奉りける」と前置きして、つぎのような歌を詠んでいます。

春秋におもひみだれてわきかねつ
時につけつゝうつる心は

彼は春と秋どちらがいいかと問われ、あれこれ考えているうち、思いが乱れて、ついにどちらがいいともいえなくなってしまったのです。現代ふうに考えれば、こんな問いに思いが乱れるなどというのは、ずいぶん素朴な、子供じみたことのように思えるかもしれません。春には春の、秋には秋の、それぞれ捨てがたい風情があるからです。［　B　］、こうした素朴な問いによって、自然の美しさに対する感受性は磨かれていったのです。春と秋いずれか、という問いに答えようとすれば、とうぜん春の景色を心に思い描き、秋の風物に心を馳（は）せてみなければなりません。そしてそれらを心のなかで思いくらべているうちに、自然の美しさに対する自分の気持ちがしだいにはっきりしてゆき、何気なく見過ごしていた風物のひとつひとつを美という基準から見直すようになる。それが美への第一歩です。たとえば③後鳥羽院のつぎの歌が、それをそのまま語っています。

見わたせば山もとかすむ水無瀬（みなせ）川
夕（ゆうべ）は秋となに思ひけん

春の夕べ、院は水無瀬の離宮から山もとかすむ水無瀬川をながめやり、その風景の美しさに打たれて、なぜ自分はこれまで、夕暮れ

の美しさは秋がいちばんだ、などと思いこんでいたのだろう、と述懐されているのです。こうして、美の世界はしだいにひろがってゆきます。詩歌とは、芸術とは、美の発見史といってもいいでしょう。そして、美の発見とは美を自覚することにほかなりません。

日常の生活のなかで、私たちは毎日、無数のものを見ています。一日の生活のなかで一人の人間が接する対象は、それこそ数えきれないほどです。そのような対象のなかには、とうぜん美しいと感じられるものもあれば、醜いと思われるものもある。また、美とか醜などとは無関係のものもたくさんあるでしょう。私たちは毎日生活しながら、無数の対象と接し、無数の刺激を受けとり、それを自分なりに【　Ⅵ　】して生きているわけです。

それほど多くの刺激を受けとっているのですから、私たちはいちいちその刺激について考えこんだりしません。何かを美しいと思っても、そのつど立ちどまって、しみじみと美的感覚に浸ってはいられないのです。したがって、私たちは美しいと思われるものも、深く心にとめずに見過ごしてしまう。［　C　］、美を美として、はっきり自覚しないままに暮らしているのです。

たとえば、きょう一日、あなたは何を美しいと感じたか、と問われたなら、私たちはその問いに充分答えられるでしょうか。何を美しいと感じたかって？　さあ、何だろう、何かを美しいと思ったかな……せいぜい、そんな答えしかできないはずです。何かを美しいと感じとり、それを心に刻みこむためには、かなりの注意力が必要であり、美に対する感受性をつねに磨いていなければなりません。そして、そのような感受性を不断に反省し、自分はどんなものを美しいと感じ、どんなものを醜いと思っているのだろうか、という自分の「美学」をいつも自覚していなければならないのです。

いまから千年近くも前に、一人の女性によって書かれた『枕草子』は、いわば作者（　X　）の〝美学原論〟ともいえるものだと思います。彼女はこの随筆のなかで、自分がどんなものを美しいと感じ、どんなことを醜いと思うか、それをひとつひとつ自分の胸に問い合わせながら、丹念に書きつづっているからです。［　D　］この筆者は、それらについて自問自答することにより、あらためて自分の美意識を確認していったのでしょう。その文章の多くが、「うつくしきもの」は、「ゆかしきもの」は、「きよしと見ゆるもの」は、「あはれなるもの」は、「わびしげに見ゆるもの」は、「あぢきなきもの」は、「めでたきもの」は、「あさましきもの」は、「こちよげなるもの」は、というふうに、何々は、という形で記されていることが、④それをよく語っています。

『枕草子』という書名のいわれについては、いろいろな説があります。［　E　］、つねに座右（ざゆう）に置くべきものという意味から「備忘録」「日記」のことだとか、「枕」を「枕ことば」と解し、歌枕、すなわち歌語についての案内書の意とする説もあるようです。が、私は田中重太郎氏が指摘されているように、「『枕』とは枕言、題の義で、この冊子中の『山は』『川は』『すさまじきもの』『にく

きもの』の類をさす」というふうに解すべきではないかと思います。そして、そこにこの作品の何より大切な意味がこめられているのではないかと思うのです。［　F　］、美意識というものは、このように、ひとつひとつ確認し、あらためて自覚することにより、はじめて成立するものだからです。「春は、あけぼの」というその書き出しが、広く日本人に膾炙（注）しているのは、それが日本における美学の第一歩だからではないでしょうか。

（森本哲郎『そして、自分への旅』）

注　膾炙（かいしゃ）している・・・人々の評判になって広く知れ渡ること。

問1　二か所の（　X　）に共通して入る人名として適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は1。

ア　紫式部　　イ　小野小町　　ウ　和泉式部　　エ　清少納言　　オ　樋口一葉

問2　［A］・［B］・［C］・［D］・［E］・［F］に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は2。

ア　A　したがって　　B　が　　C　ただし　　D　たぶん　　E　つまり　　F　言うなれば
イ　A　ですから　　B　しかし　　C　つまり　　D　おそらく　　E　たとえば　　F　なぜなら
ウ　A　きっと　　B　そして　　C　すなわち　　D　なぜなら　　E　ただし　　F　たぶん
エ　A　よって　　B　けれども　　C　要するに　　D　思うに　　E　中には　　F　仮にも

問3　【　Ⅰ　】・【　Ⅱ　】・【　Ⅲ　】・【　Ⅳ　】に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は3。

ア　Ⅰ　普遍的　　Ⅱ　内面的　　Ⅲ　基本的　　Ⅳ　不変的
イ　Ⅰ　不変的　　Ⅱ　基本的　　Ⅲ　普遍的　　Ⅳ　内面的
ウ　Ⅰ　客観的　　Ⅱ　主観的　　Ⅲ　先天的　　Ⅳ　普遍的
エ　Ⅰ　主観的　　Ⅱ　客観的　　Ⅲ　普遍的　　Ⅳ　先天的

問4　【　Ⅴ　】・【　Ⅵ　】に入る四字熟語とその意味の組み合わせとして最も適当なものを後の選択肢の中からそれぞれ選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は、Ⅴが4、Ⅵが5。

Ⅴ　（四字熟語）
a　一日千秋　　b　一期一会　　c　千変万化　　d　千差万別

（意味）
①　さまざまに変化して定まることのないさま。　②　待ち遠しく感じるさま。
③　滅多に遭遇することがないということ。　④　様々に異なって同じでないこと。

Ⅵ　（四字熟語）
a　取捨選択　　b　試行錯誤　　c　二者択一　　d　一喜一憂

（意味）
①　多くのものから必要なものを取り、不要なものは捨てること。　②　二つの事物からいずれか片方を選ぶこと。

③　行動と失敗を繰り返しながら解決方法を見つけること。　④　喜んだり心配したりして落ち着かないこと。

〈選択肢〉

ア　a―①　イ　a―②　ウ　b―③　エ　b―④　オ　c―①　カ　c―②　キ　d―③　ク　d―④

問5　――線①「子供たちがいっせいに気味悪がった」とあるが、子供たちが美しいと感じなかった理由を説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は6。

ア　都会の子供たちは煤煙の影響で星の輝く空でも汚れていると考える習慣がついているから。
イ　都会の子供たちは満天の星が輝くほどの山奥は薄気味悪い場所だと学習してきていたから。
ウ　都会の子供たちは満天の星の輝きを美しいと感じることのできる環境に住んでいないから。
エ　都会の子供たちは満天の星が輝く空でも排気ガス等で汚染されていると教わってきたから。

問6　――線②「紀貫之」・③「後鳥羽院」とあるが、筆者は二人の和歌を引用してどのようなことを示したかったのか。最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は7。

ア　春と秋のそれぞれの風情に思いを致すことで、自然を美しいと感じる理由や、美しいと感じる自己の内面が知れること。
イ　春と秋のそれぞれのよさに思いを巡らすことで、自然の美しさに対する感受性が磨かれ、美の世界が広がっていくこと。
ウ　春と秋の美しさに思いを致すことを繰り返せば、個々の美しさや風情のなさに対する自己の思い違いが修正されること。
エ　春と秋の様々な風景に思いを巡らすことで、個々の季節への揺るぎない観賞力が育ち、春秋論争に終止符が打てること。

問7　――線④「それ」の指示内容について説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は8。

ア　無数の対象から感受される美醜のイメージを丹念に記録しておけば、自分の美的感覚を磨くことにつながること。
イ　無数の対象が発する美醜の感覚を記録する習慣を作っておくと、自分の美的感覚を確立することにつながること。
ウ　『枕草子』の作者が、自分の美意識の発見のために、数少ない美しいものだけを取り上げて心に刻んでいたこと。
エ　『枕草子』の作者が、自分の美意識の確認のために、無数の対象を相手に美醜を見分ける習慣を作っていたこと。

問8　本文の内容や筆者の考え方を示したものとして適当でないものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は9。

ア　自分が美を感じる事象をことあるごとに思い出し、その際の内面を分析してみる必要がある。
イ　自分がどのようなことに美を感じるかを自覚し、その感受性を常に反省しておく必要がある。
ウ　春と秋の美しさはどちらが勝っているかとの論争を重ねながら、日本人は美感を磨いてきた。
エ　人間の持つ美的感覚は生まれつきのものではなく、経験したり教えられたりすることで育つ。
オ　『枕草子』を、「備忘録」・「日記」とか、「歌語についての案内書」と解釈するべきではない。

二、次の文章はまはら三桃の『伝説のエンドーくん』の一節である。緑山中学校の「北野徳明」は一見穏やかそうに映る人物だが、実際は内部に強い暴力性を抱え込み、その発作が現れるのを恐れて生徒の前ではあえて「物静か」に振る舞っている美術の先生である。その影響から、二年三組の授業は収拾がつかず、そのクラスの生徒（湯川）が陰で他の生徒（上原）たちからいじめられている状況でもまっとうな指導ができずにいた。本文はその翌日の場面から始まる。よく読んで後の問に答えなさい。

次の日の昼休み、北野は二年三組の教室に向かった。昨日あれから、ひとりになって考えた。そして、北野はやはり直接訴えようと決めたのだ。

①正直言うとこわかった。

二年三組では、ちょうど給食を食べおえたところだったらしく、生徒たちは片づけをしていた。北野が入っていくと、「何事か」というようにうかがったり、生徒同士顔を合わせたりしている。

北野は入り乱れる生徒の間を抜けて、②おもむろに教壇に立った。

「ちょっと話があるのですが、いいでしょうか」

さして太くはないが、ぴんと張った声で言い、生徒たちを見つめた。しんと静かになる。

「きみたちに、美術に対する姿勢を考えてもらいたいと思います」

「……」

「はあ？」

「何、それ」

生徒の間からひとたび声がもれると、あっという間にざわめきが広がった。

「猫背です」

男子のふざけた声がして、どっと笑いが広がった。

「ひゃひゃひゃ」

待ってましたとばかりに手をたたいたのは、上原だった。とってつけたような空笑いをする。

北野は両肩に力を入れた。

「人は大昔から、ものを作って生きてきました。獲物を射止める武器を作り、それを調理する道具を作り、住まいを作ってきた」

「はあ、それで？」

生徒のチョウハツ[a]にのらぬよう、北野は大きくひとつ息をついた。だいじょうぶのようだった。もやもやとした気配は感じるが、魔物はまだ目覚めてはいないようだ。

「そのうち道具に細工をしたり、住まいの洞窟（どうくつ）に絵を描いたりするものが出てきた。芸術の始まりです」

つとめて落ち着いた声を出す。少数だが、自分の話を聞いている生徒の視線も感じられて、北野はみぞおちのあたりに手をやった。目を覚ますな。

祈るような気持ちになる。

「道具や住まいが進化するとともに、細工や装飾もより高度になっていきます。人々は、美しい道具を作ることの楽しさに気がついたからです。そんな大昔の人たちの感性は、私たちの中にも息づいていると思います」

そこまで言いおえると、いかにもかったるそうな声がした。

「せんせー、もういいですか。おれら、サッカーしたいんすけど」

上原が、ふてぶてしいうすら笑いをうかべている。〔　ア　〕

「美術なんか時間のむだだし」

その表情に、わずかな狂気の粒子がまじっているのを感じたとたん、北野の体のおくでぞろりと何かが地面をはうような鈍い音がした。

自分の中にあるものが上原の中にもある。北野は確信した。二つは独特の波長を探りあい、勝手にキョウメイ[b]しているらしい。

その証拠に上原の目には、鈍い光がやどっていた。ぞっとするようなどす黒い光だ。〔　イ　〕

いけない。

北野は両手で机のはしをにぎり、足をふんばった。

「美術を、芸術をばかにしないでほしい」

しぼり出すように言う。

「いばるな、へぼのくせに！」

呼応するような声が返ってくる。上原の狂気が今まさに飛び出してこようとしていた。未成熟でむき出しのままの幼稚な力だ。

〔　ウ　〕

北野はぐっと、相手の目を見すえた。全身全霊で、黒い光をおさえつけるように。

だいじょうぶだ。

自分に言いきかせる。少なくとも自分のほうが魔物をコントロールする力はあるはずだ。もう何十年も飼っているのだ。たかだか十四歳の上原などとは格がちがう。

上原の胸をにらむ。上原の中に巣くう、魔物の目をとらえる。

北野は歯を食いしばった。そのすき間から、おし殺したような声が出た。

「ああ、おれはへぼだ」

おし殺されてはいるが、不思議な響きを持った重低音に教室中が静まりかえった。

「芸術にすがってしか生きられないへぼだ。だけど、だからこそ、③芸術の輝きを知っている」

その表情がどう迫ったのか、数人の生徒が身をちぢめ、あとずさった。上原さえもひるんだように口をつぐんだ。〔　エ　〕が、すぐに、

「なんか、やば。行こうぜ、みんな」

と、声をあげた。〔　オ　〕そばにいた同級生の腕を引っぱるようにして歩きだす上原の背中に、北野は小さく息をひとつついた。

「ほかにも用のある生徒は出ていってかまいません」

落ち着いた声でそううながすと、数人の生徒が目くばせしながら出ていき、教室に残ったのは半分ほどの生徒になった。その中に湯川もいた。が、顔をあげてはいなかった。〔　カ　〕北野は生徒たちを見渡す。深い息をひとつはいて呼吸を整えた。

「みなさんは、絵や陶器や彫刻を見て、きれいだなとか、すてきだなと感じたことはありますか?」

数人の生徒がうなずき、数人の生徒が考えるようにだまっている。

「では、洋服とかアクセサリーなどにはどうですか?」

「洋服は大好きです。アクセサリーとかもかわいいし」

いちばん前に座った女子の生徒が言った。

「そうですね。じゃあ、あなたがかわいいアクセサリーを見たとき、どんな気持ちになりますか」
「うーん、なんかどきどきする」
女子生徒は明るい顔になった。
「ときめくっていう感じでしょうか。ともかく心が明るくなりますね」
北野の言葉に女子生徒はうなずいた。
「それが芸術作品が人の心にもたらす最大の力です。何もかもが④八方ふさがりで落ち込んでしまったとき、芸術が心にふっとわずかな光をもたらすことがあります。芸術は、胃袋は満たしてはくれませんが、心には響く。豊かな気持ちになるんです」
北野の言葉に、⑤最前列の女子生徒が首をひねった。
「実感がないですか」
「だってアクセサリーを見て、どきどきしたあとは欲しくなるもん。見ただけでは心が満たされない。どっちかというと、飢え渇く感じ」
教室の中に笑いがおこった。しかしそれは空気をやわらげるのに有効な笑いだった。
「でもさ、どきどきするっていうことは、気分が上がるってことじゃない？　落ち込んでいたならちょっとは元気になるよね」
後ろの女子生徒が言った。声がはずんでいる。
「それにさ、服を着たときのこととか、想像すると楽しい」
ほかにも同意の意見が出された。そこにひとりの男子生徒が声をあげた。
「先生、今は芸術の話をしているんですよね。服とかアクセサリーとかとは、根本的にちがうんじゃないですか。服なんかは、どんどん売らなきゃいけないから、美しさがわかりやすいけど、芸術はわかりにくい。むしろ、わざとわかりにくくしているものもあると思います。わかりにくいものが、心に響きますか」
⑥熊谷という男子生徒だ。なかなかうがった指摘である。
「そうですね。だから学校で、学習や訓練をしているんです。ほかの教科と同じです。芸術も勉強をしないとわかるようにならない。いや、そうじゃないな。親しんでいるうちに、わかるようになるんだ」
北野は顔をあげて、教室を見渡した。生徒たちの表情が少し輝いて見えた。言葉を重ねる。

「美しさに敏感になってくるんです」

思春期の心は、向こう側にごく近いところにあると北野は常々思っている。この時期には、心が追いつかないくらい、体が一気に変化する。自分でもとまどってしまうような、アンバランスやひずみが向こう側につながる通路を作りだすのだとしたら、思春期は【　　】と言える。

「人生の中でいちばんやわらかな心を持つきみたちは、本当はそれがよくわかっているはずなんだよ」

切実な声が出た。なぜだか生徒たちの顔が判別できなかった。フィルターがかかっているようにぼんやりとしている。けれど、彼らのまなざしだけは感じられた。まるで光の塊のように、尊い。

北野は目を細める。

「よかったら」

北野はうわずりそうになる気持ちをおさえて、ごく平坦な声を出した。

「この先は、今出ていった生徒たちにも伝えてください」

教室にいる、ひとりひとりの顔が北野の視界にもどってくる。それを確認し、出ていった生徒の顔も思い出す。

「きみたちにもこの先、いろんなことが起こるだろう。もしかしたら、ものすごくつらいことがあって、もうどうしようもなくなって、死にたいと思うようなときさえくるかもしれない。そんなときにはぜひ、美術館に飛びこんでほしい。常設展なら、百円くらいで見られるところもある。たった百円で、きっと心になんらかの作用があるはずだ。うそじゃない。芸術は人の心を救う。芸術っていうのは、そういうものなんですよ」

北野は言いきった。自分の中の魔物にも届くように。自分の魔物が芸術を創りだすことに昇華[注]され、それを生徒に伝えていけるようにと、祈りながら。

注　昇華・・・ある状態が高度な状態に飛躍すること。

問1　――線a「チョウハツ」・b「キョウメイ」と同じ漢字が使われているものをそれぞれの選択肢から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は、aが10、bが11。

a　ア　登山道で急にチョウボウが開けた。　イ　難しい検定試験にチョウセンする。
　　ウ　成績の低迷にはゼンチョウが見られた。　エ　お客様をテイチョウにおもてなしした。

b　ア　彼は世界的にユウメイな脚本家だ。　イ　明治時代の小説にカンメイを受けた。
　　ウ　自分には家族を守るシメイがある。　エ　天候が悪化してライメイもとどろく。

問2　本文から脱落した次の一文を戻す箇所として最も適当なところを〔　ア　〕・〔　イ　〕・〔　ウ　〕・〔　エ　〕・〔　オ　〕・〔　カ　〕の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は12。

〈脱落文〉　精いっぱい強がっているが、負け犬のふるまいだった。

問3　――線①「正直言うとこわかった」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを次の中から選んで、解答欄にマークしなさい。解答番号は13。

ア　クラスの全ての生徒に美術や芸術を否定される確信があったから。
イ　前日の一件で助けてやれなかった湯川に非難されると思ったから。
ウ　三組の問題児の上原に精神的に追い詰められると感じていたから。
エ　北野自身の中に巣くう魔物を制御できなくなる危険があったから。

問4　――線②「おもむろに」・④「八方ふさがり」の意味・内容として最も適当なものをそれぞれの選択肢から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は、②が14、④が15。

②　ア　慌てた様子で　　イ　ゆっくりと　　ウ　のんびりと　　エ　あっという間に

④　ア　どの方面にも支障があり、何もできずにいる状態。
　　イ　全てがうまくいかず、周囲からも見放された状態。
　　ウ　何をやっても失敗ばかりで、意欲が削がれた状態。
　　エ　誰からも相手にされずに、悩んでばかりいる状態。

問5　――線③「芸術の輝きを知っている」とあるが、北野は生徒に特に伝えたい「輝き」をどのように理解しているか。最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は16。

ア　日常生活で使用する道具に施す細工や装飾で、楽しく生きていく方法を教えてくれるもの。
イ　何気ない時に何気ない手段で、落胆した心を好転させ、人生の喜びを喚起してくれるもの。
ウ　困難な状況に陥った時に光明をもたらし、豊かな気分に誘い、人の心を救ってくれるもの。
エ　心が飢え渇いた時に、美しさやかわいらしさの際立つ表現で人の心を満たしてくれるもの。

問6　――線⑤「最前列の女子生徒」とあるが、彼女の発言やその後の展開について説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は17。

ア　ただ明るくなるだけで心は満たされないと正直に告白して周囲の同意を喚起することに成功している。
イ　物欲が生まれることで逆に飢えや渇きを覚えるという実利的な発言が逆に場の雰囲気を和ませている。
ウ　どきどきはしても豊かな気持ちに至ることはないとひねくれて周囲から失笑を買うはめになっている。
エ　心に響いて豊かさも感じられるのは実質的な利益が得られた時だけと断言して周囲を困惑させている。

問7　――線⑥「熊谷という男子生徒だ」とあるが、この生徒と北野との対話内容はどのようなものか。最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は18。

ア　服やアクセサリーに比べて芸術は理解しにくいから心に響かないと本質を突く指摘をした熊谷に、まず親しんでくれれば美に敏感になり、芸術の奥深さに少しでも近づいていけると北野は諭(さと)している。
イ　服やアクセサリーと違って芸術には美しさがないから理解できないと生意気をいう熊谷に、他の教科と同じように訓練したり勉強したりしないと理解できるようになるはずがないと北野は戒めている。
ウ　すべての芸術は一般の人にはわからないように制作されていると決めつけている熊谷に、とにかく避けることなく日常的に親しんでいくことで芸術作品の真意が見えるようになると北野は説いている。
エ　すべての芸術はわかりにくく作られているから心に響かないと落胆している熊谷に、芸術もしっかり勉強を繰り返して馴れ親しんでいくことによってその真価がわかるようになると北野は慰めている。

問8　【　　】に入る表現として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は19。

ア　人生で最も不安定な時期　　イ　芸術に理解が及ばない時期
ウ　芸術にもっとも近い時期　　エ　意外にも現実味のある時期

三、次の文章を読んで後の問に答えなさい。設問の都合上、表記を改めた箇所がある。

今は昔、唐に荘子といふ人ありけり。家いみじう貧しくて、今日の食物絶えぬ。隣に監河候といふ人ありけり。〈　ア　〉それがもとへ、今日食ふべき料の粟を乞ふ。〈　イ　〉河候が曰く、「今五日ありておはせよ[注1]。千両の金を得んとす。それを奉らん[注2]。いかでかやんごとなき人[注3]に、今日参るばかり[注4]の粟をば奉らん。返す返すおのが恥なるべし」と言へば、荘子の曰く、「昨日道をまかりしに[注5]、後に呼ばふ声あり。〈　ウ　〉ただ車の輪跡のくぼみたる所にたまりたる少水に、鮒一つふためく。〈　エ　〉何ぞの鮒にかあらんと思ひて、寄りて見れば、少しばかりの水に、いみじう大きなる鮒あり。『何ぞの鮒ぞ』と問へば、鮒の曰く、『我は河伯神の使に[注6]、江湖[注7]へ行くなり。それが飛びそこなひて、この溝に落ち入りたるなり。喉乾き死なんとす。我を助けよと思ひて、呼びつるなり』と言ふ。答へて曰く、『吾今二三日ありて、江湖もとといふ所に遊びしに行かんとす。そこにもて行きて放さん』と言ふに、魚の曰く、『更にそれまでえ待つまじ。ただ今日一提ばかりの水をもて、喉をうるへよ』と言ひしかば、さてなん助けし。鮒の言ひし事、我が身に知りぬ。更に今日の命、物食はずは生くべからず。【　　】更に益なし[注8]」とぞ言ひける。それより、【　　】といふ事名誉せり。

『宇治拾遺物語』

注1　おはせよ・・・来てください。　注2　奉らん・・・差し上げましょう。　注3　やんごとなき人・・・隣家の大切な人。
注4　参る・・・召し上がる。　注5　まかりしに・・・通っていましたら。　注6　使・・・使者。
注7　江湖・・・地名。あとの「江湖もと」も同じ。　注8　益なし・・・役に立たない。

問1　本文中から脱落した次の一文を戻す箇所として最も適当なところを〈　ア　〉・〈　イ　〉・〈　ウ　〉・〈　エ　〉の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は20。

〈脱落文〉　顧みれば人なし。

問2　――線①「後に呼ばふ声あり」とあるが、ここで「呼ばふ」行為をした鮒の言い分について説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は21。

ア　河伯神の使者として江湖へ行く途中に日照り続きで喉が乾いて死にそうなので水が欲しいという訴え。
イ　河伯神の使者として江湖へ行く途中に誤って車輪の跡に落ちて死にそうなので助けてくれという訴え。
ウ　河伯神の使者と連れ立って江湖に行く道すがら離れ離れになって心細いので捜してほしいという訴え。
エ　河伯神の使者の過ちによって路傍に落とされて喉が乾いたので江湖に連れて行ってほしいという訴え。

問3　――線②「え待つまじ」・④「物食はずは生くべからず」の現代語訳として最も適当なものをそれぞれの選択肢から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は②が22、④が23。

②
ア　待てないわけがありません　　イ　十分に待つことはできます
ウ　何とか待ってみるつもりです　　エ　とても待つことはできないでしょう

④
ア　食べないでいたら生きることはできない　　イ　何か食べたら生きることはできる
ウ　なんでも食べることで生き続けられる　　エ　物を食べなければ生きる甲斐はない

問4　――線③「我が身に知りぬ」とあるが、ここの「我が身」についての説明として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は24。

ア　貧しくて隣人に食料の恵みを乞うてみたところ、五日の後に来れば大金をあげると言われて得した気分になった自分自身の体験。

イ　貧しさで家族を養えないことを隣人に相談したところ、千両の金を持っているのに援助できない詫びを言われた自分自身の体験。

ウ　今日一日を生きながらえる食料を隣人に願い出たところ、五日の後に千両の金を差し上げると悠長な話をされた自分自身の体験。

エ　今日一日分の食料を恵んでくれるよう熱心にお願いしたところ、偶然にも隣人が千両の寄付を引き受けてくれた自分自身の体験。

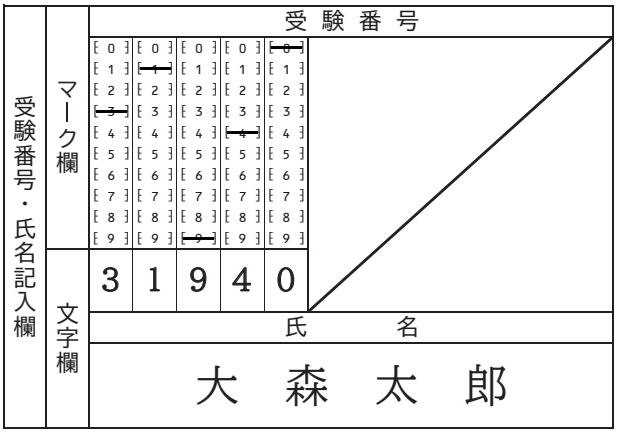
問5　二か所の【　　】に共通して入る語として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は25。

ア　今の千金　　イ　後の千金　　ウ　今の一提の水　　エ　後の一提の水

解答用紙記入上の注意

記入上の注意

1. この用紙は、コンピュータが直接読み取るので汚したり、折り曲げたりしないで下さい。
2. 記入は HB 以上の鉛筆・シャープペンシルを使用して下さい。
3. 間違いは消しゴムで完全に消して下さい。
4. マークは ⊏ ⊐ の枠内に、⊏⊐ のように線を引いて下さい。ぬりつぶす必要はありません。
5. 誤って破れたり、汚したり、折り曲げたりしたときは、監督者から新しい用紙をもらって下さい。
6. 受験番号・氏名・解答欄の記入方法は、問題用紙の記入注意をよく読んで下さい。



解答欄の記入の仕方

1. 問題は一から三までで 1 ページから 18 ページにわたって印刷してあります。
2. 問題によって解答群は（ア）から（エ）まで、あるいは（ア）から（コ）までなどさまざまですが、答えは 1 つしかありません。
3. 各問題の答えは解答用紙に明確にマークしなさい。
4. 問題をよく読んで、解答群の中から、正しいと思う答えの記号を選びます。

   例　次の熟語の読み方の正しい解答を選びなさい。

   会得（ア．エトク　　イ．アイトク　　ウ．カイトク）

   正しい答えは「ア」ですから、文字欄に（ア）と記入し、「解答マーク欄」に線をひきます。（右記入例参照）
5. 解答用紙と問題用紙は別々に提出しなさい。
6. 試験時間は 50 分です。
7. 合図があるまで開かないで下さい。

マークシート記入例